

その解釈が面白いんです。
逆に言えば、どう解釈しても
構わないんです。

地歴・公民科
水泳部副顧問

高橋 忠祥

『文豪たちの怪しい宴』

東京創元社 創元推理文庫
鯨統一郎 著



先生になりたいと思ったきっかけは？

僕、結構影響を受けやすいタイプなんです。小学校6年生の時に中学校体験ってのがあって、地元の中学校に体験入学をするってのがあったんです。その時、中学校の講堂にみんなが集められて、前で中学生が言うわけです。「この中で夢がある人！」って。僕、正直、夢とかなかったんですが、僕の真後ろに座っていた子が僕の腕を掴んで、手を上げさせたんです。ヒソヒソ話で「僕、夢ないで？」って言ったら、その子が「社会の先生でええやん！」って。もともと社会が得意ってのもあったから、その子はそう言ったのかもしれないけど、その時の出来事がずっと記憶の隅に残っていたんです。それから少し時間が経って、中3の頃には一番好きな科目でもあり、一番得意な科目でもあった「地理」をどうにか生かせる仕事がしたいなと思いました。当時の僕は、それが教員だと思ったんですね。

— 鯨さんってちょっとお茶目なところも
あったりしますね。タイトル見るだけで
も伝わってくるものがあるんですけど、そ
ういうクスクスっとさせるような要素は、

— 鯨さんってちょっとお茶目なところも
あったりしますね。タイトル見るだけで
も伝わってくるものがあるんですけど、そ
ういうクスクスっとさせるような要素は、

— 今回おすすめされている本は鯨統一郎
さんの『文豪たちの怪しい宴』。鯨さんが
お好きなんですか？



はい。きっかけは母が歴史好きで、ある日、鯨さんのデビュー作の『邪馬台国はどこですか？』を買ってきたんです。そして僕に「読んでみて」と言って渡してきたんです。鯨さんは自分の考えというか、いろんな考えを本にする人なんです。今までも見たことのないような角度からモノを切り込んでいたり。「あ、そんな考え方あるんや」という物事を多角的に考えるようになったきっかけの人ですね。

本文にもありますか？

もちろん。基本的に鯨さんの話ってバーを舞台に展開することが多くて、バーの中で教授とバーテンダーとお客さんの3人の会話が成り立つんです。どの話もだいたい3〜4人で構成されるんですけど、その中でバーテンダーが「はっ！」って気づくことがあったりとか、バーテンダーが何も言わずにいるんなものを出してくるんで、教授が感嘆としているとか。

— その中でも今回は『文豪たちの怪しい宴』。軽く内容を教えていただけますか？

これもバーで展開される話です。大学の文学部の教授がいるんですけど、その人と女性バーテンダーの会話が進みます。バーテンダーが今までこんな本を読んだとか、今こんな本にハマってるところから話がスタートします。そして、教授が彼女の話を聞きながら、講義みたいな感じで話をしていくんです。そこに、デビュー作の『邪馬台国はどこですか？』にも出てきた宮田っていうクセ者が出てくるんですよ。その宮田が今回は文豪にハマったと。歴史の勉強に一区切りついたから、最近は文豪たちをいろいろ調べていると言っわけです。漱石の『こころ』だとか太宰の『走れメロス』だとか、みんなが教科書でも読んだことがあるような名作を、今度は宮田が独自の角度で切り込んでいって、教授と論戦を繰り広げるといっ…。

— 宮田視点での切り込みに対して、教授が反論を

するところ。

宮田って「誰もが思いつかんやる」という面白い切り込み方で、それも論理的に話していく。信じ込ませてくる。そして聞いている人もそういう風に思えてくるみたいなの。

— 面白そうですね。

今までに読んだ名作も、この視点であらためて読むとさらに面白くなる。そんな風にしてくれる本だと思います。

— この本を読んで、昔読んだ本を再度読み直すってことはありましたか？



『走れメロス』をもう一度読みました。中学校2年生で読んだ作品ですが、大人になった今の視点でもう一度深く読むことができたと思います。そしたら、この作品に対してもっと興味が出てきました。芸人であり作家の又吉直樹さんがされているユーチューブチャンネルで『走れメロス』の解説を見たりしました。

— もっと深く作品を読み込みたいと思わせてくれるきっかけになったんですね。

そうですね。今までに読んだことのない本もいくつかあるんですけど、芥川龍之介の『藪の中へ』という作品は読んだことがなくて。僕、芥川の本ってあまり読んだことがないんですよ。宮田と教授のバトルを読んで、次は『藪の中へ』を読もうと思っています。

— 『文豪たちの怪しい宴』で一番印象に残ったところはなんですか？

漱石と太宰の作品は教科書でも学ぶので、この二人の話ですかね。実は、漱石の『こころ』についてはあんまり内容を覚えていなかったんですけど、「そんな話やったんか」と。

— たしかに『こころ』は授業で一部しかしませんもんね。『先生と遺書』のところだけですかね。

『遺書』だけで140ページくらいありますもんね。



『この』って登場人物が4人くらいじゃないですか？なぜか1人だけ名前がついているんですよ。そこに言及してあるんです。で、「なるほどー」って。その解釈が面白いんです。答えってどうやっても分らないんで。逆に言えば、どう解釈しても構わないんです。

——総じて、おすすめポイントとしては、本が読みたくなる本ってことですかね。

本当にその通りだと思います。いろんな本を読まないとなつて思わせてくれる本ですね。

今までに読んだ名作も、この視点であらためて読むとさらに面白くなる。そんな風にしてくれる本だと思います。ただ読まないと思って思うよりは、新しい視点を得られて、それを知りたくって読むので、強制ではなくて自発的に読書がしたくなる本と言えるかもしれませんね。読書に対するハードルを下げられるかもしれませんね。

——では最後に、この本を大阪国際の生徒のみんなにおすすめするポイントを。

本が読みたくなる本。今まで教科書でやってきたことがより深みを増して、もう一度読みたくなる気持ちにさせてくれる本です。基本的にセリフ、鉤括弧がついている文章で進行するので、説明口調もなく、スーッと頭に入ってきます。

本が好きになる本だと思います。ぜひみんなにも読んでほしいです。

インタビュー

大阪国際中学校高等学校 図書館司書
株式会社 紀伊國屋書店 角井 貴乃